

ビジネス文書の書き方読本(3)

—産業日本語研究会 ライティング分科会編について—

On “How to write business documents Part 3 / Writing Subcommittee Edition”

東京外国語大学 大学院総合国際学研究院 教授

佐野 洋

株式会社東芝を経て、1995 年から東京外国語大学に在籍。

✉ sano@tufs.ac.jp TEL 042-330-5376

① はじめに

1.1. 書き方読本

産業日本語研究会・ライティング分科会（以下、「ライティング分科会」）では、ビジネス文書を対象としてその内容が伝わる（納得してもらえる）文書の書き方指南（マニュアル）の作成を目指している。ライティング分科会編集のビジネス文書／書き方読本（試案）（[1]、以下「書き方読本（試案）」）は、ビジネス文書／書き方マニュアル（[2]）を土台とした取り組みの成果である（[3]、[4]）。

表 1 は、書き方読本（試案）を特色付ける書き方に対する考え方である。ことばに拠る表現は思考の表出であって、その表現の産出過程に思考特徴が顕れるという考えの下に、まず、物事の見方（概念形成の観点から、人がどのように世界を認識（受容し、予測する）のかを検討し、その認識（概念）の組み立て方（知っていることから知らないことを知る推論や類推）を考察した。

表 1 書き方読本（試案）の特色

目的	物事の見方、筋書き、語り方の3つの視点で書き方（作文技法）を検討する
各視点	・物事の見方（本質の概念）に志向性（と結果としての指向性）があること ・筋書き（理に適う筋道）は、合（道）理性に物事の見方が関わること ・語り方（判断の伝達）は読み手の行動変容につながる
特徴	書く（叙述）行為のさいの思考様式の気付きと理解を促す

ライティング分科会の議論では物事の捉え方が違うと注意を差し向ける先に差異が生じることを明らかにし、物事を合（道）理性のある筋道（判断）で表出できるような技能の明確化を目指した。物事の捉え方は、読み手の行動変容につながる語り方（判断の伝達）にも影響し、作文様式を大きく二区分することが分かった。

表 1 に挙げた各視点、(1) 物事の見方（本質の概念）、(2) 筋書き（理に適う筋道）、(3) 語り方（判断の伝達）に沿った作文技法の考え方は、目的（読み手の信念更新）を根拠として伝達内容を表明することであって、表明過程の核心は主張の正当化のための知識と手段である。上記の括弧内の表現はそのまま思考に関わる様式（記憶、推論と断定、表出）を表している。既に記憶については [5] で、表出については [3] で報告した。本稿では、推論と断定—出来事連鎖の叙述法（推論過程の表出）に強く連関する推論の様式と因果性について、ライティング分科会での議論の成果を述べる。

1.2. 知識と推論

ライティング分科会では、推論を知っていることから知らないことを知る手立て（推論の様式とその叙述の仕方）であると考え。様式の観点では「既存の知識を組み合わせて新しい知識を作ること」（[6]:6 頁）であり、叙述の仕方からは「知られていることを基礎に、知られていないことについてなされる叙述」（[7]:39 頁）である。なお人によって認識され世界観として関連付けられた記憶が知識である。

人によって認識されるとはということなのか。米盛

〔8〕によると、C.S. パースは「表意された対象についての意識」（16 頁）であるといい、「すべての認識は表意されたもの」であり、唯識思想が説く八識説にいう意識の働きである〔9〕：26 頁）。ただし、脳内の神経表象が如何に主観的に体験される心的表象として得られるのか〔10〕：165 頁）と、それと同時に心的表象が記号という象徴的表象に写像されて〔10〕：160 頁）、その後、如何にして思考対象となるのかは非常に難しい課題である。

ただ、知識を「人によって認識され、明示的に記述された判断の体系」（〔6〕：4 頁）と関連性を限定することで、体系化された知識間の関係を捉えることができ、推論に下位区分（演繹、帰納、発想）を与えることができる〔6〕：6 頁、〔11〕：30 頁）。そうして体系化された知識が在るとの前提で検討を進めることができる。なお、ライティング分科会は、類推も推論の形式に含めている。

1.3. 概念と意思決定

記号接地の問題〔12〕：92 頁）や記号創発の問題〔13〕：60 頁）などは、ライティング分科会では能わないからひとまず棚上げにし、ライティング分科会は実在の基本となる心的表象（あるいは相¹）から議論を始めた。モノを表す記号の象徴的な概念には形姿・外形実在のモノと内実・役割実在のモノの二種類ある〔3〕



図 1 不断の世界の量化例²

ことを提唱し、この二つは、人による認識（表意された対象についての意識）結果であって、これを前提に知識が蓄積されると推測する。

経験に先立つ物事の概念化の区分を概観するとき、不断（諸行無常）の世界を固定化して捉える手段に、物事の絶対化（分離化）と相対化（関係化）があると視た。

図 1 はそのイメージで、図中で水滴が飛散する部分では、不動点を使った量化であって数え上げできるモノが実在する。飛散直前の連続体までは、不変点によって水面から水滴へのモノの移り変わり（比べ上げ）が分かる。

前者は、世界はモノから成っていて超時間で構造的な世界観が想起されると同時にモノは位置変化するように視得る。後者では、世界は関係で出来ており、相変化は従順序で起こる。このとき機能的な世界観が採られ、モノは質変化すると見做せる。位置変化と質変化を併せると全変化である。

世界の分離化では、不動点を離散化の尺度として分節した記号表象を使い、量化されたモノ世界を描き、ある出来事とより後の出来事間の推移（演繹的な推論）を好み、概ね確定的（決定論的）に結論付ける（判断する）傾向にある。

一方で、関係化された世界では、不変点を離散化の尺度として分節した記号表象を用い、関係化されたモノ世界を描く。ある出来事とより前の出来事に関連（帰納的な推論）を好み、総じて仮定的（確率論的）に判断する傾向がある、などのことをライティング分科会は明らかにしてきた〔1〕、〔4〕。

1.4. 叙述法と推論過程

本稿ではライティング分科会で討議した、知識の相互交換とその理解に用いる因果の在り方とその叙述法の議論を取り上げる。因果の在り方に対する認識の仕方が言語的世界〔7〕：32 頁）の意味として、実在性の概念の違いに相対し、より強固にその因果性の偏向（時間と場所の近接性〔14〕：35 頁）や縁起の理〔9〕：24 頁）があることを述べる。したがって、語（概念や観念）が表す意味の差異は、とりわけ出来事連鎖を叙述する表現—文章の筋書きの中心にある因果連鎖を表す文法形式の違いとして浮き彫りとなる。

次章で意思決定と深い関係にある注意について述べる。3 章で因果について概観し、実在性の二つの概念に

1 唯識思想の相分と見分〔20〕：56 頁）の相分にあたる

2 生成 AI (bing) を使って作成したイメージ

依存して二つの因果性があることを確認したあと、4章では日本語の説明（主題—解説）表現に不可欠なノダ文の研究成果を取り上げ、発想推論や類推推論と共感、脳領野の結びつきを議論する。

前稿〔5〕でも釈明したが、ライティング分科会は二つの基本概念の区分けで極論する傾向が強い。何故なら本分科会は論旨展開の筋書きには二つの型（説得型と共感型）があるという期待に基づいて文章論を展開しているからだ。繰り返しの弁明として、ライティング分科会は心的表象の概念化過程は想像を超えて複雑な多相体であることも弁えてはいるつもりである。

② 注意と分節

2.1. 意思決定文章論

前稿〔5〕で述べたように、ライティング分科会は文を叙述するさいの書き手の意思決定を重視し、叙述を「書き手（人）は実際にどのように文章を叙述・記述するのか、なぜそうするのか、その叙述・記述が人に読まれた結果として何が生じるのかとかったテーマに取り組む文章論」と考えている。表2に区分を再掲する。

表2 叙述上の意思決定〔5〕の表1を再掲

規範的	どのように叙述するのかの合理的な基準を 探求する（認知心理学的）。
記述的	叙述の有様を説明する。現実の叙述形式と 規範的叙述形式の食い違いが説明対象（観 察事実）となる（文章論的・技巧実践的）。
処方的	人の叙述を規範的合理性に近づけるための 支援方略を提案する（工学的・応用実践的）。

書き方読本（試案）〔1〕では、規範的なアプローチを取り入れていることから、意思の決定要因である注意について、まず検討する。

2.2. 二つの注意

意識がある状態を意識清明といい、意識障害は『何らかの形で意識清明でなくなった状態』である〔15〕。意識障害を評価する尺度は、比較的軽度の障害（言葉による応答がある、あるいは刺激しないでも覚醒している状態）の場合の評価水準に見当識障害の有無を挙げてい

る。見当識は、『自身の置かれている場所・時間・自分自身への認識の程度』をいい、意識障害の研究から注意（見当識）には空間注意と時間注意があることが知られている〔16〕：28頁）。これは〔5〕でも取り上げた事柄で、神経心理学の観点から意識された知覚における注意とは、「注意は意識を一定の処理課題に集め、その処理を効率化する働きである」という。

2.3. 身体表象と二つの注意

もう一つ、自分自身への認識—自己意識が何であるかは極めて難解な課題であるけれども、自己身体感覚認識の観点から空間と時間の二つの軸があることが明らかになっている〔17〕：25頁～27頁）。嶋田〔17〕：154頁～163頁）は、脳のミラーシステムの解説の中で、他者の意図理解を通じた目的論的推論説や、自己の能動的予測に起因する予測コーディングモデルを挙げたうえで、脳が自他融合と自他弁別を行う仕組みとしての機能解釈を示しながら、内在性と外在性の運動表現と、それが機能する脳領野を示している（161頁／図4.14）。嶋田は、脳内の身体表象の自他性を論じ、『われわれの身体は視覚（感覚）を媒介として他者へと開かれている』ということであると述べ、ミラーシステムを「間身体性の器官」とする〔17〕：160頁～163頁）。そして、外在性と内在性の身体の差異の整合性照査が自他弁別であるとし、差異を解消しようとする調整の働きが自他融合であるとする。

ミラーシステムと自己身体認識の脳領野の図〔17〕：161頁／図4.14）にはブロードマン分類番号が記されている。例えば、脳科学辞典のブロードマンの脳地図〔18〕を参照すると番号と脳領野名の対応が分かる。この図の自己身体イメージはブロードマン39野と40野付近で下頭頂葉（左側）と呼ばれ、運動意図の生起に関わっている〔17〕：80頁～82頁）。同図の他者性部分は、上側頭溝（21野、22野）と側頭頭頂接合部（右側）（39野、40野）あたりで、後頭葉の視覚野聴覚野（41野、42野と22野）に近い。いずれも後頭葉の視覚野からの情報を受けるが、後者は聴覚の影響があるらしく、角田〔19〕や月本等〔20〕：184頁～194頁）が言語音の聴音特徴と脳領野の活動の対応関係について、実証実験を通じて違いがあることを指摘している。

2.4. 意図と推論

脳領野の図（[17]：161 頁 / 図 4.14）によると、内在性身体部分は、下前頭回弁蓋部（44 野）を中心とした脳領野が対応し、運動意図や身体所有感に関係する運動前野（6 野）（[17]：77 頁～82 頁）や前頭前野の内側が関わる。

ライティング分科会報告（[1]）でも取り上げたように、これら領野はメンタライジングネットワークに当たる。梅田によると、メンタライジングとは「他者の心を推論する意味で用いられている用語」（[21]：16 頁）だと述べ、『心の理論』にかかわるネットワークで、前頭前野内側部・帯状回前部近傍、側頭頭頂接合部、上側頭溝後部などから成り立っている』という（[22]）。キーマン（[23]）はメンタライジングを「他者の思考や動機づけのシミュレーション」（93 頁）であると説明する。思考や感情は具体的なモノではなく、内在性身体の変化は、主に質的な状態の変化に拠る時間的な変化から推し量るからだろう。

次章では、量化されたモノから世界が成る場合（实在論）の因果の捉え方と、関係化されたモノを認める場合（観念論）の因果の考え方についての本分科会での議論を説明する。

③ 二つの因果性

3.1. 因果（性）は何なのか

因果性は何を表すのかと、因果性は実在するのかという二つの問題がある（[14]：3 頁）。我々が、空間や時間を直視できないのと同様に、因果性も直視（知覚）できず、観測装置や計測装置を使って間接的にも直視（知覚）できない（[14]）。空間は幾何的な存在であって、物質でもエネルギーでもないと考えられているし、時間もその存在の確証はない（[24]）。因果性についていうと、例えば「見れば分かる」のは必然だと感じるが、「見る」と「分かる」の間に結合する関係は直視できないし、知覚できる対象物もない（[14]）。(科学的に立証された因果律を除き) 因果性は実在するのか否かは不明である。因果とは何であって、そして因果は在るのが問題となる。

ライティング分科会は、世界を固定化して捉える手段には、物事の絶対化（分離化）と相対化（関係化）があると考

えることから、因果性の解釈にも影響を及ぼすと考えている。というのもビジネス文書が言語社会集団内で流通する文章であること、読み手の行動変容に繋がる書き方（合理的な思考の表現）であることによる。因果性についても、それらと同様に文化介在の影響が大きいと考えている。

本分科会では因果とは何であるかについて、モノの実体と因果という関係の実体の在り方から考察し、モノが外界に在るとする外界实在論の考え方と、観念論—仏教にいう唯識の思想（縁起の理）にあるように関係概念としてものごとをみる（[25]：42 頁～47 頁）考え方を検討した。

3.2. 絶対化（分離化）と因果性

量化されたモノから世界が成る場合（实在論）の因果の捉え方を、西洋の因果論（[26]）を参照して議論した。

因果の種類と関係性の観点からの因果の分類の関係を、因果性各説との関わり具合を挙げる（[26]：19 頁、図 1.1 から引用）。図 2 で、差異形成は何が結果を生み出したのか（原因や理由の変化）に焦点があり、産出はどのような結果を生み出すのか（結果の変容）に注目する。影響ベースは（因果の）関係について、意図的な操作や介入が可能であることいい、類型ベースは（因果の）関係は不可侵で、その類型は一覧として世界にあることをいう（[26]：12 頁～19 頁）。

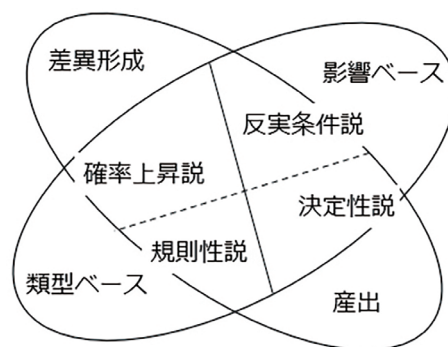


図2 [26]：図 1.1 から引用

因果性を説明する学説には、規則性説、決定説、確率上昇説、反事実条件説がある（[14]、[26]）。これら因果性の各説の詳細は省略する。

本分科会では、差異形成と産出の位置を原因・理由—結果の順序に合わせ、学説の大体の考え方の傾向と、英語の表現として出来事の叙述の仕方の点から掛け合わせしてみた。表 3 に挙げる。

表3 因果と英語の叙述形式

	影響ベース		
産出	主語-述語	仮想法	差異形成
	接続表現	受動, 仮主語-述語	
	類型ベース		

主語 - 述語の述語は他動詞を指し、結果状態を想起する表現（結果構文など）である。接続表現は、時間の連続性を強く意識するような原因や理由を表す従属節を含む表現である。仮想法は、いわゆる仮定法で非現実的な状況や話者の願望や要望、命令などを表す表現であり、仮主語 - 述語は、話し手の認識結果（時間、天候や状況など）を表現する it を用いた表現に対応する。

3.3. 相対化（関係化）と因果性

関係化されたモノを認める場合（観念論）の因果の考え方について、ライティング分科会では、東洋の仏教因果論（四縁・六因説）を取り上げ、その内容を検討した。

兵頭（[27]）によると、四縁が『仏説であつたか否かは全く不明である』としたうえで、釈迦の没後、説教を分析することを目的に起こった当時のアビダルマ論者³（仏

教哲学の論者）の『それは刹那滅なる心（識）心所の生起に関する縁の分析を中心としていることである』という。新纂浄土宗大辞典（WEB版、[28]）によると、四縁は、(1) 因縁、(2) 等無間縁、(3) 所縁縁、(4) 増上縁の四つの縁をいい、この縁は因と同義で原因という意味である。

因縁は、直接原因を指し、いわゆる因果関

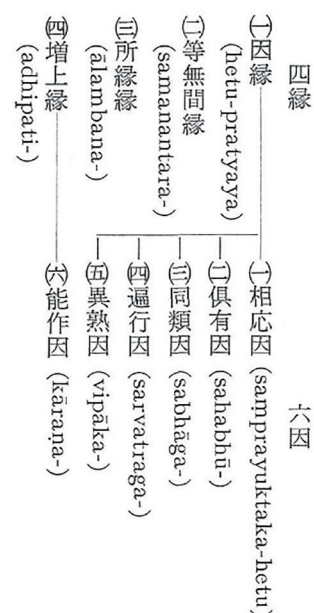


図3 [29]: 95 頁の図から引用

係の原因・理由に相当する。増上縁は、「間接的な原因となる縁」といい「ある一つのもは、それ以外のすべてのものの増上縁である」という。末木（[30]）が指摘するように諸法無我、相依性や縁起のことである（29 頁～31 頁）。その他の縁の説明は省略する。

さらに兵頭（[29]）によると「四縁と六因の両説は説一切有部で発展したもので、有部の因縁論」といい、四縁と六因の関係を論じ、その関係を図3のように示している。図3にあるように六因説は、因縁によって形作られた事象の原因を示すものである。因縁を認識する論述（教え / ダルマに対する考察）の一つで、木村によると、世親作『俱舍論』等に見られ、説一切有部説として知られる（[31]）。各因の詳細は省略する。

このように縁は、一刹那としての「ここ今」の状態に至った、あるいは生じせしめた諸要因を探るものである。意図に操作したり干渉したりする対象ではなく、認識的な捉え方に解釈の基礎をおいている。

縁の想起の仕方は、我々日本人の普通の生活に深く浸透していると考え、本分科会では図2の差異形成と産出を借用したうえで、縁起の理に則して（世界に）関係は在るとの考えから、（論旨展開の筋書き区分も考慮し）類型ベースを認識的に二分する視点、共感志向と不問志向を取り入れた。

ここで共感志向は、出来事の前後順序について認識的な解釈や説明が必要であることをいい、不問志向は、出来事の前後順序について解釈や説明は不要であることを表す。そして、日本語の表現として出来事の叙述の仕方の点から掛け合わせた表を挙げる（表4）。

表4 関係と日本語の叙述形式

	共感志向		
差異形成	主題-解説	接続表現	産出
	並べ文表現	受動，自動 詞表現	
	不問志向		

主題 - 解説は、いわゆる「～は～だ」という表現で、ノダ文（「のだ、のです、のである」など）を中心とした表現である。並べ文表現は、動詞や助動詞の連用テ形で接続する文連鎖である。接続表現には「ので、から」だけでなく「ため、訳、くせに」などの事象間の認識的

3 <http://www.wikidharma.org/index.php/%E3%81%82%E3%81%B3%E3%81%A0%E3%81%A4%E3%81%BE>

な関係説明の表現を含む。

なお、六因の各因を用いて図2に対応する図を考えることができる。出来事の前後順序について、認識的な解釈や説明が必要であって差異形成であるのは遍行因である。産出に焦点がある場合は異熟因で、出来事の前後順序について、解釈や説明は不要であって差異形成である場合、同類因である。産出に焦点がある場合は能作因である。

本章で述べたように、原因－結果という因果性について、形姿・外形実在の概念化では、原因を基点として因果性を考えようとする。それに対して内実・役割実在の概念化では、結果を基点として因果性を考えようとすることが分かってきた。

④ 共感とノダ文の働き

4.1. 認知的な共感

本節では、3.3節で挙げた共感志向の「共感」を認知心理の観点から検討する。梅田が、共感とは『人々の共存と情報の共有のための根本的な働き』（[32]：v）と指摘するように、情報共有には共感が欠かせない。梅田（[21]）に拠ると、共感は認知と情動で二区分されるとされ、認知的共感は「他者が何を知り、何を意図し、何を望んでいるかを知ること」であり、情動的共感「他人が何を感じているかという他者の情動を自分が感じかつ共有すること」である（124頁～125頁）。前者の認知的共感『他者の心の状態を頭の中で推論し、理解する』（[32]：4頁）ことである。つまり推論なのであって因果性の解釈につながり、発話の場の状況に応じて、物事の理（ことわり）を伝える思考行為は、主題に対する解説であって、表現の選択と産出がその叙述行為となる。

4.2. 認知過程とノダ文

日本語のノダ文は、主題－解説という因果の理を叙述する表現である。2.1節で述べたようにライティング分科会は、文章論に取り組むアプローチとして認識的な枠組みを採用していること、表4にあるように差異形成と共感志向のクロス点にあることなどから、認知言語学の観点から論じたノダ文の考察を取り上げる。

高（[33]）は、現代日本語における「ノ（ダ）」の意味の分布を、認知言語学の参照点構造（[34]）を用い

ることで説明している。高は、自らの日本語学習の経験に基づき、日本語母語話者が日常的な使用の中でどのようにノダ文を用いているのかという認知過程（機能分析）に検討の中心を据えて、従来研究では周知的とされたノダ表現も含めて、ノダ文が表す意味の拡がりの有り様を網羅的に捉え直した。従来の研究成果が示す「説明」「関係づけ」「関連付け」などの意味について、認知的際立ち（注意と選択による知識状態の変化）の観点によって分析している。

4.3. 情報共有の道具

高はノダ文が表す意味を表現効果と呼んでいる（[33]：117頁）。表現効果には、(1) 知識更新（獲得と蓄積）、(2) 知識統合（共通化）、(3) 知識共有（協調）があることを示したうえで、これら3つの意味の要素間には方向性を持つ推移関係があることを示した（図4）。この要素群とその関係性を「フレームに基づくモデルによるノダの意味の多義構造」と呼ぶ（[33]：225頁）。そしてフレーム内の典型用例が持つ要素の違いがノダ文の意味の多様性を生み出していると考える。

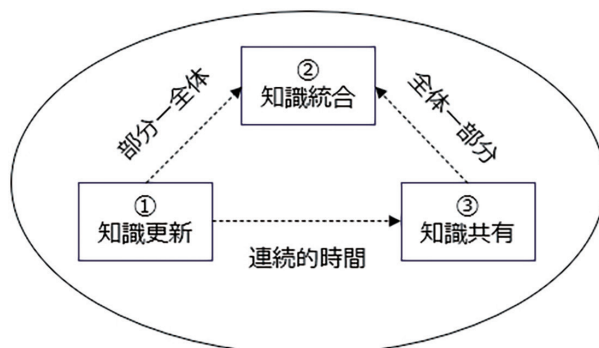


図4 ノダの意味の多義構造（[33]：図8-11から引用）

高によると、「表現効果が変わらない」という基準からノダ文の核となる意味が、③（「情報共有」）にあると指摘する。他者への伝達効果の安定性を根拠として、つまり他者の思考の推論という認知行為における叙述行動を、発話伝達の効果から言い直したものである。知識共有はノダ文の典型使用で、この類型に属するノダ文の意味は「念押し、訂正、告知、告白、決意」などである（[33]：217頁）。

知識統合は、送り手と受け手による情報の共通化であり交話の規約に基づく。それに対して知識共有は送り手と受け手の協調であって、それは認知的な共感なのだろう。「主題－解説」構造は、直感的に因果性の説明をノ

ダ文の典型例と見做しがちだが、高は、認知的な共感の意味をノダ文の典型使用とした。ライティング分科会が主張する論旨展開の筋書きの二つの型(説得型と共感型)からみても得心する結果である。

4.4. メタ推論とノダ文の表現効果

図4のノダ文の相互関係の図式を推論形式の視点で解釈し直すと、「②知識統合」は「原因・理由－結果」を表す時間順行の(演繹的な)推論である。「部分－全体」は「結果から尤もらしい原因・理由」を探る時間逆行の(帰納的)な推論だと考えられる。「全体－部分」は「知っている関係を使って知らない関係を知る」発想あるいは類推にあたる。

主題－解説という説明行為は、(本分科会でいう)推論思考行為の結果である。その動機は(移り気な)注意に喚起され、空間性と時間性の偏りがあること(2.3節)を指摘した。

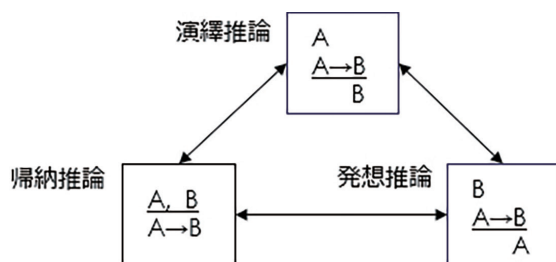


図5 推論パターン ([6]: 図1.3 から引用)

図4の構図をメタレベルの推論([6]: 7頁)の構図に対比させたのが図5である。メタレベルとは推論の使い方や推論の機能についての知識である。日本語ノダ文の典型例は、2.4節で述べた他者の心を推論する認知的な共感に基づく知識共有である。相手との差異を解消しようとする(内在性感覚・運動の)調整の働きである([17]: 160頁)。自己の身体表象の観点から自他融合への推移であり、差異の解消は状況に依存するから推論パターンから見ると発想(あるいは類推)に対応すると考えられる。

例えば、KJ法を考案した川喜田二郎は「発想法」([35]: 147頁～149頁)の中で、『日本人は基本的な発想レベルでの直観力が著しく高い。例えていうなら、外国人は5つか6つの要素の結合についてしか、暗示をつかみにくいかもしれないが、日本人はそれが10以上

あってもその中からかなり複雑な総合的な意味を一挙に見いださう。』と評する。続けて引用すると、『…(略)…ところが、そこだけが高いけれども、小さな直観的综合能力、小さなヒントのひらめきを、事実 に密着しながら、大きなひらめきに組み立ててゆく方法を日本人はもっていない。』と解説している。

5 おわりに

5.1. 共感型の筋書き

一般に、意味の伝え方の諸相に関わる要因は統語構造を中心に多岐にわたり、文(句)は、それが担う意味と記号連鎖としての形式的・構造的・規約的性質がある。本稿では、ライティング分科会の議論を紹介し、語(概念や観念)が表す意味の差異を中心に、認知視点から注意と情報共有を取り上げ、この二つの観点で因果連鎖を表す思考様式の違いを見てきた。この違いは言語社会集団がもつ思考習慣としての偏りであって、日本語では共感型の筋書きが好まれやすいことを示した。

5.2. 筋書きと表現意図

説得型の筋書きでは、影響力(意図的な操作や介入)が根幹となる考え方である。その叙述は、表3から主語－述語表現である。主語－動詞構文の中でも、他動詞文が望むのは、書き手が外在性の知覚(感覚)を実感し、結果の見通しにおいて、確信と予測可能性を感じることができることなのだろう。

一方、共感型では、感受力(認知的な解釈や説明)が肝心なのである。表4から、主題－叙述構文の中でも、ノダ文が望むのは、書き手が内在性の知覚(感覚)を実感し、感情の見通しにおいて、安心と予測可能性を感じることができることであろう。

ところで、意識潜在する期待(二つの基本概念の区分け)を拠り所とするのは立派な確証バイアス([36]: 166頁)だが、ライティング分科会は、露出が多いと信頼される単純接触効果([36]: 178頁)にも期待している。本稿はタイトルが変わらず連番が3である。

参考文献

- [1] ライティング分科会, ライティング分科会報告書, 特許情報研究所: 一般財団法人日本特許情報機構, 2023.

- [2] 日本語マニュアルの会, “日本人のための日本語マニュアル (暫定第1版),” 11 2018. [オンライン]. Available: <https://ngc2068.tufs.ac.jp/nihongo/htdocs/>.
- [3] 佐野洋, “ビジネス文書の書き方読本―産業日本語研究会ライティング分科会編について,” 一般財団法人日本特許情報機構, 東京都江東区, 2023.
- [4] ライティング分科会, ライティング分科会報告書, 特許情報研究所: 一般財団法人日本特許情報機構, 2024.
- [5] 佐野洋, “ビジネス文書の書き方読本 (2)―産業日本語研究会ライティング分科会編について,” 一般財団法人日本特許情報機構, 東京都江東区, 2024.
- [6] 新田克己, 知識と推論, サイエンス社, 2002.
- [7] S.I. ハヤカワ著、大久保忠利訳, 思考と言語における言語, 岩波書店, 1985.
- [8] 米盛裕二, パースの記号学, 勁草書房, 1981.
- [9] 横山紘一, 唯識の思想, 講談社学術文庫, 2016.
- [10] シモーナ・ギンズバーグ、エヴァ・ヤブロンカ著、鈴木大地訳, 動物意識の誕生 (下), 勁草書房, 2021.
- [11] 米盛裕二, アブダクション 仮説と発見の論理, 勁草書房, 2007.
- [12] 佐治伸郎, “信号, 記号, そして言語へ コミュニケーションが紡ぐ意味の体系,” 共立出版, 2020.
- [13] 谷口忠太, 心を知るための人工知能 認知科学としての記号創発ロボティクス, 共立出版, 2020.
- [14] スティーブン・マンフォード、ラニ・リル・アンユム著、塩野直之 谷川卓訳, 哲学がわかる因果性, 岩波書店, 2017.
- [15] 脳科学辞典編集委員会, “意識障害,” 4 3 2021. [オンライン]. Available: <https://bsd.neuroinf.jp/wiki/%E6%84%8F%E8%AD%98%E9%9A%9C%E5%AE%B3>.
- [16] 山鳥重, 記憶の神経心理学, 医学書院, 2002.
- [17] 嶋田総太郎, 脳のなかの自己と他者 身体性・社会性の認知脳科学と哲学, 共立出版, 2019.
- [18] 脳科学辞典編集委員会, “ブロードマンの脳地図,” 19 12 2020. [オンライン]. Available: <https://bsd.neuroinf.jp/wiki/%E3%83%96%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%89%E3%83%9E%E3%83%B3%E3%81%AE%E8%84%B3%E5%9C%B0%E5%9B%B3>.
- [19] 角田忠信, 日本語人の脳 理性・感性・情動、時間と大地の科学, 言業社, 2023.
- [20] 月本洋, 日本語は論理的である, 講談社・選書・メチエ, 2009.
- [21] 梅田聡編集, 共感, 岩波講座 コミュニケーションの認知科学 2: 岩波書店, 2014.
- [22] 梅田聡, “教育講演I 共感の理論と脳内メカニズム,” 高次脳機能研究 (旧 失語症研究), 2018.
- [23] レベッカ・フィンチャー―キーファー著、井関龍太・川崎恵理子訳, 知識や身体からできている 身体化された認知の心理学, 新曜社, 2021.
- [24] カルロ・ロヴェェリ著、富永星訳, 時間は存在しない, NHK 出版, 2019.
- [25] 横山紘一, 唯識の思想, 講談社学術文庫, 2016.
- [26] ダグラス・クタッチ 相松慎也訳, 現代哲学のキーコンセプト 因果性, 岩波書店, 2019.
- [27] 兵頭一夫, “「四縁」についての一考察,” 印度學佛教學研究 31, 1983.
- [28] WEB 版新纂浄土宗大辞典, “四縁,” 1 4 2018. [オンライン]. Available: <https://jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php/%E5%9B%9B%E7%B8%81>.
- [29] 兵頭一夫, “六因説について―とくにその成立に関して―,” 大谷學報.
- [30] 末木剛博, 東洋の合理思想, 法蔵館文庫, 2011.
- [31] 木村誠司, “アビダルマ文献の六因仏説論について,” 第 48 号, 駒沢大學佛教學部論集, 2017.
- [32] 梅田聡 編集, 共感, 第 2 巻, 岩波講座 コミュニケーションの認知科学: 岩波書店, 2014.
- [33] 高甜, “参照点構造に基づく「ノ(ダ)」の意味研究,” 東京外国語大学, 2025.
- [34] R. Langacker, “Reference-point Constructions,” Cognitive Linguistics, 1993.
- [35] 川喜田二郎, 発想法 改版―創造性開発のために, 中公新書, 2017.
- [36] 情報文化研究所著、高橋昌一郎監修, 情報を正しく選択するための認知バイアス事典, フォレスト出版, 2021.